

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	2018 年度
氏名	山中 千鶴	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	青年の労働における役割と葛藤方略がストレスに与える影響
------	-----------------------------

本文概要

【問題】 現代において新卒者の離職率の高さが問題となっている。若い労働者が抱える職業性ストレスの特徴の一つに「役割ストレス」が挙げられる。役割ストレスは田尾（2005）により、果たすべき役割が期待されるなかでその役割を果たせないストレスと定義されている。田尾（1986）は役割ストレスを中間管理者に想定している。しかし、新卒者は学生アルバイトから仕事上の責任など葛藤の質が変化しており、独自の役割ストレスを経験することが考えられる。また、役割ストレスは対象相手との意思疎通のあり方でその後のストレス反応に大きな影響を与えると予測される。特に日本の労働者は、個人の特性以外にも年長者に対して自己表現を控え相手へ反論をしない傾向を示す（Midooka, 1990）など文化的な影響を受けている。葛藤相手に応じて行動を変えることに関して、中津川（2011）は葛藤の表出と葛藤対処への積極性の2軸4方略から説明されており、職業性ストレスとの関連が予測される。

【目的】 社会的立場によって役割ストレスや葛藤方略の使用の違いがストレス反応に与える影響を探索的に検討することを目的とする。日本人はストレスへの対処に関して、上下関係管理や自己抑制のコンピテンスが高いことから、相手との関係性で葛藤を抑制する可能性がある。また、若い労働者と学生アルバイトでは働き方や質の違いからストレスの質の差があると推測した。

【方法】 アルバイトを行う学生に無記名式質問紙形式、20代労働者に Web 上アンケート形式の調査を行い、以下の回答を求めた。①フェイスシート（性別、年齢、職種等）②仕事への満足感③上司との関係性④役割ストレス尺度：田尾（1986）を一部変更⑤葛藤方略尺度：潜在性と建設性の2次元による対人葛藤対処方略尺度（中津川ら、2010）を使用⑥精神的健康度：職業性ストレス B 項目を使用。

【主な結果と考察】 **因子構造の確認**：①**役割ストレス**：学生のデータを用い探索的因子分析を行った。その後、社会人のデータで確認的因子分析を行い、4 因子構造を確認した。②**葛藤方略**：探索的因子分析を行い、因子負荷量.35 以下の2項目を削除し4 因子構造を確認した。③**精神的健康度**：元の尺度の因子数より少ない因子数での説明を試みるため高次因子分析を行った。高次に2 因子を確認し、精神的疲労 ($\alpha=.83$)、身体的疲労 ($\alpha=.88$) と命名した。**得点差の検討**：役割ストレスは4 因子とも社会人の得点が有意に高くなった。社会人は環境の変化から、役割ストレスを感じる場面に曝され、学生よりも得点が高くなると考えられる。葛藤方略因子でも同様の検討を行い、非建設的顕在化方略で社会人の得点が有意に高くなった。学生は社会人よりもアルバイトを辞めることが比較的容易で、葛藤内容を相手に直接伝える必要に迫られないと推測される。**役割ストレス、葛藤方略、精神的健康度の関連の探索的検討**：まず、役割ストレス因子と精神的健康度因子の因果関係を検討した。次に、役割ストレス因子と精神的健康度因子に対する葛藤方略因子の媒介効果を探索的に検討した。しかし、葛藤方略因子はすべて媒介効果がみられなかったため、葛藤方略因子を従属変数としてモデルを再検討した。その結果、独立変数を役割の曖昧さ、役割葛藤、役割過重、従属変数を非建設的潜在化方略、精神的疲労、身体的疲労としたモデルが得られた。このモデルについて、学生と社会人で影響の差を検討した。多母集団同時分析の結果、学生では役割葛藤から非建設的潜在化方略に正の影響、社会人では役割の曖昧さから非建設的潜在化方略に正の影響がみられた。学生は2人以上の立場が上の者の発言に板挟みになることに負担を感じ、非建設的潜在化方略を使用し、社会人は自分のすべき仕事が不明瞭になると非建設的潜在化方略を使用する特徴が示された。